

日印経済安全保障研究会
インドの国内政治情勢



第三回日印経済安全保障研究会ではインドの国内政治情勢について伊藤融 防衛大学校教授にご講義いただきました。伊藤融教授と平松賢司理事長との対談を行いました。

(平松) 本日の日印経済安全保障研究会では、伊藤融防衛大学校教授からインドの内政について伺いました。その内容を踏まえて先生とお話をさせていただきたいと思えます。

世界最大の民主国家とも呼ばれるインドの内政は、我々にとっても非常に関心があります。他方でなかなか複雑な側面もあり、日本

人には理解することが難しい部分もあると思えます。特に、中央と地方の関係、比較的大きい地方政府の権限、それらの相互関係がどうなっているのかということも、我々がインド内政を観る際には非常に重要なポイントになります。来年インドは総選挙を迎えるということ、モディ政権が今後も継続するかどうかという非常に重要な時期に来ており、

ある意味、既にインドは選挙キャンペーンシーズンに入っている様相ではないかとも考えられます。

また、それら内政面での動きが様々な形でインドの外交政策にも影響を及ぼしていると思えます。難しい質問ではありますが、今のインド内政をどのように見るべきでしょうか？特に、モディ首相の力がどのような形でインド内政に作用しているのかについて、伊藤先生はどうお考えをお話いただけますでしょうか？

(伊藤) まず、モディ首相の人氣が非常に高いという点は重要です。モディ首相の人氣は、「自分たちの暮らしをよくしてくれているから」という理由よりも、「インドという国家」「国家としてのインド」を世界の中で飛躍させてくれているというイメージから起因する側面が大きいでしょう。多くのインド市民から見ると、対外的な業績を積み上げていくモディ首相がインドの希望の星のように映っているところが大きいと思えます。

(平松) 先日開催されたG20首脳会合においても、ある意味モディ首相が成功に導いたというようなイメージを世界中に与えていると思いますし、国内でもそのように宣伝されており、このことがおそらく来年の総選挙に繋がっていくことになるのではないのでしょうか。

まだ1年ありますが、来年の総選挙において我々はどういうところを見ていかなければならないのでしょうか。また、総選挙ではどのような結果が今の段階では一番予想されるのでしょうか？

(伊藤) 選挙結果を予測するのはまず難しい所でしょう。例えば多くのインド研究者が読み違えたと言われているのが2004年の総選挙です。(現在の)モディ首相の所属政党であるBJPが最初に政権を勝ち取った、当時のヴァージペーイ政権は非常に高い評価をされており、選挙前に行われた多くの世論調査においても「ヴァージペーイ政権が我々の暮らしを良くしてくれた。」という回答が多く見られました。このデータを

基にほとんどのメディアと研究者はヴァージペーイ政権の勝利を確信していました。

ところが、結果は完全にひっくり返りました。選挙結果が出た直後には、農村部が反乱を起こしたという言葉、あるいは2004年当時にBJPが掲げていた「インディア・シャインング」と呼ばれるスローガンに象徴されるインド国内での経済的オプティミズムが、都市部においてのみ観測されたことが選挙の敗北に繋がったという仮説などが出ました。また、総選挙の世論調査もそのほとんどは都市部を中心に読み書きのできる市民を主として行われたことが選挙予測の失敗を引き起こしたという説も囁かれました。

さらに、農村部に住む貧しい人々の多くが都市との生活格差が拡大する中で、当時野党であった国民会議派に票を入れる非都市部民が多かったという仮説もありますが、実際のBJP敗因の本質は定かではありませんが、

最も選挙の結果を左右するという定説が無いという点がインドの選挙予測の性格だと思います。

(平松) おそらく国民の多くは経済状況、インフレ、雇用などの問題に非常に高い関心を抱いているのは確かだと思います。例えば、最近いくつかの州で行われた選挙でも反映されている通り、州の選挙結果と中央選挙の結果は、なかなか結びつかない所があります。今回の州選挙を見ても、いくつかの選挙に於いてBJPは敗北しています。ただこれは来年の選挙に州選挙の結果が作用するのかというと、必ずしもそうではないのかもしれませんが。やはり先生が仰った通り、モディ首相の人気は相当高く、むしろモディ人気の方が強く出る可能性もあると思いますし、これからモディ首相をはじめBJPは色々な州においてきめ細かい選挙キャンペーンをしていくことでしょう。BJPとその後ろにあるRSS(民族義勇団)の組織力は共になかなか優れたものがあり、この二つの組織力を活用しながら選挙活動を展開していく

と思います。中央と州の関係という面において、国民生活の不安・不満というものはどちらかというと州の責任という方向に向けられていて、必ずしも国民の批判がモディ首相には向かわないという側面があると考えられますが、その辺はどう思われますか？

(伊藤) 今日の発表と議論の中でも出てきたと思いますが、私自身、国民の身近な生活問題から起因する不満の度合いが相当高いというのは世論調査の結果の通り事実だと思えます。そして結果的にそれらの不満は、今年行われたカルナータカ州での州議会選挙に於いても作用していると感じます。自分たちの雇用が守られていない不満、インフレ問題、そして厳しい生活状況という全般的なイシューは明らかに現在の州政府への悪印象に繋がり、州選挙での与党敗北という結果に働いたことは事実だと思えます。他方インフレなどの諸問題が連邦・国レベルの選挙結果に影響しないのか、という点も必ずしもそうではないでしょう。過去の経済専門家の方々からのデータを見

ると、インフレ率が高い場合には与党が国のレベルの選挙において敗北することがあります。インドの国政選挙における一番重要な要素は、生活レベルの側面で言うと物価の問題なのかもしれないですね。これは多くの国民が物価問題を国の責任であるという形に捉えていることを物語っていると言えるでしょう。

(平松) また最近では、モディ首相あるいはBJP政権が宗教の自由への規制、ヒンドゥーナシヨナリズム的な傾向が強くなっていると、特に国際的な場において言われることが増えてきていると思えます。先生からご覧になって、モディ首相はこの10年間の間に、より強権的な色合いが強くなったと感じておられますか？

(伊藤) 私自身の感覚では2014年からの第一期政権の5年間はそこまでナシヨナリスティックではなかったと思うのですが、2019年以降からその傾向が明らかに強くなったと思います。そもそも2014年の選挙時に多くの有権者が期待したのは、モディのヒ

ンドゥーナシヨナリズム的側面ではなく、「モディならこの閉塞した経済状況をなんとかしてくれる」というような期待感があったのだと思います。また、グジャラート州の州首相として、グジャラートを飛躍させたというイメージもモディ政権への期待感向上に作用したのではないのでしょうか。

ところがその5年間の中で経済状況があまり好転していない状況下、2019年の総選挙直前に勃発したパキスタンから仕掛けられたテロに対して即座に空爆を行ったことにより、一気にインド国内におけるナシヨナリズムの機運が拡がっていききました。同時にASAT(衛星破壊)実験といったようなものも行い「強いインド」というイメージを国民に示す形で選挙を戦い、この路線がモディ政権の勝利につながりました。この辺りからインド政治におけるヒンドゥーナシヨナリズム路線が強まったのではな

いかと思います。

(平松) 現在、世界中がインドを注目しています。特に経済的な意味、あるいは戦

略的にもインドの重要性はますます高まっております、世界がインドの動向を注視している状況にあると思いますが、本日先生から伺った、ナシヨナリズム、宗教、プレスノ自由、といった様々な国内問題を国際社会に対しても十分説明していくことが、今後のインドにとって

重要となってくるのではないのでしょうか。ですのでは是非インドという国がますます経済的にも発展し、一方、世界的にも尊敬される国になつていくことを期待したいと思えます。選挙の結果でどのような政権が誕生しても、正しい道を歩んでもらう、ということを我々も期待したいですが、いかがでしょうか？

(伊藤)そうですね、やはり外野が上から目線でインドに対してものを言うことは全く効果的ではないと思います。経済的にも、例えば日本の技術などをインドが必要とするような存在になることがまずは必要不可欠なのではないのでしょうか。今現在と30年前の世界・経済システムは異なっており、人権、自由などの権利が守られてない社会では企業活

動ができない時代になってきています。そうしたことを踏まえると日本とインドの間、あるいは欧米をも含めて、関係が深まれば深まるほどインドも一般的な国際的人権制度基準に合わせざるを得ないような状況が自然と生まれてくると思います。

(平松) そうなってもらいたいと思います。インドは非常に重要な国ですし、立派な国だと思えますので、そういうことを踏まえて、我々とも対話をしていって、日本とインド、あるいは世界とインドにとっても良い関係を築けることが重要になるでしょう。本日もどうもありがとうございました。

(伊藤) どうもありがとうございました。